

ジョン・ヘンリー・ニューマンの「大学の理念」

片 山 寛

1. はじめに

はじめまして。私は、西南学院大学神学部で教理史を教えております片山と申します。主催者の方から私に、夏期学校で大学・短大の先生方の分会でセミナーをするようにというご依頼がありました。

セミナーをするということは本来、私が何か自分の考えをお話するというよりは、皆さまと一緒に何かを学ぶということだと思のです。そしてそれは非常によいことだと私にも思えます。といいますのは、私のような未熟な者が大学教育に関する自分の考えを披瀝してみても、あまり皆さまの参考にはならないといいますか——それはちょっぴり悲しいですが——それよりもむしろ、過去の偉大な先生方の思想を御紹介して、一緒に学びます方が、多くの方々のためにもなりますし、私にとっても面白いように思われるからであります。またそれこそが、私が常日頃に学校で教えております「教理史」という学問のあり方でもあります。

ただひとつ問題があるのですが、私はこのセミナーに集まれる人数を前もってうかがいましたら、せいぜい20名だということで安心しておりましたら、実際には100名近い方が集まりました。午前中の「新任教師オリエンテーション」で、キリスト教主義の学校に勤めての様々な悩みについて語り合われましたが、その中に確か、「ゼミの人数が多すぎる」という悩みがありました。まさにここではゼミの人数が多すぎまして、100名では丸くなって座ることもできません。しかし皆さん、どうか我慢していただきまして、ゼミの一学生になったつもりで御参加ください。

題材といたしまして、私は「大学の理念」というテーマを選びました。私たちの職場である大学とは何であるのか、何のためにあるのか、大学は本来どのようにあるべきなのか、ということです。ここで私は、「大学の理念」という主題で書かれました一つの文書を用意いたしました。それはすでに古典的な名著とされておりますが、John Henry Newman¹⁾ 1801-1890の『大学の理念』*The Idea of a University* という本の一部です。Newmanはこの連続講演を1852年に行ないました。今から153年前²⁾のことです。この講演はのちに非常に有名になりましたので、すでに読まれた方があるかもしれません。これをお読みになればよくわかることですが、私たちが勤務する近代の大学というものは、基本的にはこのような理念に基づいて誕生したのです。いわば大学の理念の原型というべき思想がここにはあります。

ジョン・ヘンリー・ニューマンについて簡単に御紹介したいと思います。彼は1801年に3人兄弟3人姉妹の長子としてロンドンに生まれました。父親のジョン・ニューマンは銀行家・実業家でした。16歳の頃にキリスト教への一種の回心を経験して、生涯独身で神さまに仕える決心をしたと言われます³⁾。オクスフォード大学トリニティ・カレッジで学んだ後、1822年、同じオクスフォードのオリエル・カレッジのフェローに選ばれて、そこで教鞭をとります。その間、1825年には英国教会の司祭に叙階され、1828年からは大学付属聖マリア教会の主任司祭 (vicar) としても活躍します。大変な名説教家でありまして、今でもこの頃の彼の説教がよく読まれます。1832年12月から翌年5月まで、過労による病氣療養を兼ねて南欧を旅しますが、シチリア島で熱病にかかり、そのため2ヶ月ほど帰国が遅れます。この帰国の船旅の途上で書いた讚美歌「たえなる道しるべの光よ」(Lead, kindly Light)⁴⁾

1) 2010年9月19日、J・H・ニューマンはローマ法皇ベネディクト16世によって「福者」(Beatus)に列せられた。列福のための調査が始まったのが1955年であるので、決定に55年かかったことになる。

2) この拙文は、2005年8月2に行われた、キリスト教学校教育同盟の西南地区夏期学校の大学部会のセミナーにおける同名の講演を、改稿したものである。今回書き加えはしたが、元来の講演の性格を保持したかったので、日付などはそのままにした。

3) cf. J. H. Newman, *Apologia pro vita sua*, Oxford University Press 1964, p.7.

は、今でもプロテスタント、カトリックを問わず、教会でよく歌われます。7月9日によくよくぶじにロンドンの自宅にたどり着きました。

ニューマンは、1833年後半⁵⁾から「オクスフォード運動」と呼ばれる英国教会の改革運動に参加します。最初の頃は英国教会 Anglican Church の側からローマ・カトリック教会を厳しく批判する代表的論客⁶⁾だったのですが、そのうちに自分が批判するカトリックの方が実は正しいと考えるようになりまして、数年間の煩悶の後、1843年に聖マリア教会の司祭を辞任、1845年にはカトリック教会に転向します。すると、ニューマンに続いてカトリックに転向する人々、特に若い学生たちが多く出ました。それだけニューマンの影響力が大きかったということなのですが、英国教会からの彼に対する非難も相当なものがありました。このとき、オリエル・カレッジのフェローも辞任しています。しかしカトリック側の人々がニューマンを心から歓迎したとも言えない部分があって、長い間、何となく胡散臭い存在として見られていたようであります。

その後ローマでオラトリオ会という修道会に入り（ニューマンは結婚していませんでした）、1847年にカトリックの司祭に叙階され、1848年には英国にオラトリオ会を創立しています。1854年からアイルランドのダブリンに創設されましたカトリック大学の総長に就任しましたが、ダブリンの大司教と

4) 讚美歌第一篇 288. cf. *Apologia pro vita sua*, p.36. シチリア島で熱病にかかったとき、ニューマンの従者は彼の死んだ場合の指示を仰いだ。もしもの場合を考えた質問であったと思われるが、ニューマンはその指示を与えた後に、次のように付け加えた。「私は死にはしない、私は光に対して罪を犯してはいないのだから、私は光に対して罪を犯してはいないのだから」(I shall not die, for I have not sinned against light, I have not sinned against light) (ibid. p.35)。この「光」の反映が、この讚美歌に現れている。Lead, kindly light, amid the encircling gloom, Lead thou me on ; The night is dark, and I am far from home ; Lead thou me on ; Keep thou my feet ; I do not ask to see the distant scene : one step enough for me.

5) ニューマンの帰国した次の日曜日、7月14日に、ジョン・キーブル John Keble 1792-1866 が、オクスフォード大学の説教壇で説教をした。この説教は「国民的背教」National Apostasy という題で出版され、それがオクスフォード運動の始まりとなった。cf. ibid. p.36.

6) ニューマンたちが唱えたのは、真の普遍的教会はカトリック教会よりもむしろ英国教会だ、という主張であって、アングロ・カトリシズムと呼ばれている。

対立したために、一期だけで辞任しました。背景には複雑な事情があります。当時は、アイルランドはまだ英国に合併されておりまして、独自の議会を持つことも許されませんでした。カトリック教会も厳しい状況にありました。17世紀にクロムウェルがアイルランドを征服したときに、カトリック教会の教会領は数多く没収されていたのです。アイルランドの人口の90%以上がカトリックだったのですが、教会経済は厳しかった。そんな中でダブリンにカトリック大学を創立することは、カトリック教会にとっても大きな決意を要することでしたし、またそれはアイルランドの独立運動とも結びついていたのです。ニューマンは、そのような事情は当然よく知っていたのですが、大学を教会の支配下に置くことに対しては抵抗します。『大学の理念』を読めばよくわかりますが、ニューマンは、大学における教育は国家や教会に支配されない、自由なものでなければならないと考えていました。

ニューマンは英国教会からもカトリックの保守派からも非難される厳しい立場にあったのですが、その後1864年に執筆した『わが生涯の弁明』*Apolo-gia Pro Vita Sua* が非常によく読まれまして、彼の謙遜で真摯で誠実な態度が多くの人々から好感をもって受け入れられます。この本は、英国教会とカトリック教会が和解に向かって歩むひとつのきっかけにもなりました。1878年にはオクスフォード大学トリニティ・カレッジの最初の名誉フェローを与えられましたが、これはその和解のひとつの徴しだったと言えます。1879年には、教皇レオ13世によって枢機卿に任命されまして、それがニューマンの晩年の大きな喜びになりました。ニューマンのことを *Cardinal Newman* と呼ぶのはこのためです。1890年8月11日、肺炎のためにバーミンガムのオラトリオ修道会で死去。墓碑には次のような言葉⁷⁾が記されました。「幻影と表象から真理へ」*ex umbris et imaginibus in veritatem*。

7) O・チャドウィック『ニューマン』教文館1995年、139頁。

2. John Henry Newman 『大学の理念』

ニューマンの『大学の理念』⁸⁾は、1852年にアイルランドのダブリンでなされた連続講演を中心にしています。彼はそのすぐ後、1854年にダブリンに設立されたカトリック大学の初代学長に就任しているのですが、この連続講演はその新しい大学の構想に関わるものであります。第1講 (introductory) に続いて、第2 - 4講で神学と他の諸学との関係が論じられ、第8, 9講では大学とカトリック教会との関係が論じられているのは、上の事情によります。大学論として多くの国の教育制度に影響を与えたのは、主に5, 6, 7講です。以下では主にそこから、いくつか重要な箇所を紹介します。

(1) 知識を得ることそれ自体が大学の目的であること (第5講)

「知識のすべての部門はお互いに結びついている、と私は述べた。というのは、知識の主題・内容は創造主の行為と業としてそれ自体において緊密に統一されているからである。それゆえ、われわれの知識がその中へと配置されているところの諸学問は、ひとつひとつが互いに多様な関連と内的な共鳴を持っているのであり、比較や調整が許されるし、むしろそれを要求しているのである。」 (p. 76)

「そこで、大学が教える学科の範囲を拡大することが、学生のためにも重要である。学生は自分に開かれているすべての学科を履修することはできないが、その範囲全体を代表する人々の間で、その人々の下に生活することによって、多くを獲得する。……学生は、個々の教師から独立したひとつの知的伝統によって利益を受け、それは彼が学科を選ぶときに指導し、その選んだものを彼のために適切に解説してくれる。……だからこそこの教育は「Liberal」と呼ばれるのだ。自由、公正、冷静、節度、知恵などをその属性とする、生涯続く精神の習慣が形成される。それは前回の講演で私があえて「哲学的習慣」と述べたものである。他の教育の場所や教育様

8) John Henry Newman, *The Idea of a University*, ed. by Frank M. Turner, Yale University Press 1996.

式とは違った、大学で供給される教育の特別な果実はこのことである。学生の扱いという点では、大学の主要な目的は以上のことである。」(p.77) 「大学教育の目的とは何か、そしてリベラルな知識あるいは哲学的知識の目的とは何か、それが私に問われている問題である。私は、私がすでに述べたことで、非常に明瞭で現実的で十分な目的があることを十分に示している、と答えたい。もっとも、この目的は知識それ自体と分離できないのであるが、知識は知識そのものの目的でありうる Knowledge is capable of being its own end。人間の精神の構造は、いかなる種類の知識でも、それが真に知識であるなら、それ自身の報酬であるようにできている。そしてもしこのことがすべての知識について真実であるなら、あらゆる部門における真理、学問の学問に対する関係、それらの相互の位置づけ、それぞれの価値などを包括的に見ることに存していると言える哲学の場合にも特に真実である。」(p.78)

「なぜこのような（リベラルな知識と職業的な知識の）区別がなされるのか。それは、リベラルな知識であるのはただ、それ自身の要求 pretensions に基づくもの、すなわち結果に依存せず、補完を期待せず、何らかの（他の）目的によって形成され、何らかの技能へと吸収されることを拒むものだけだからである。それは、自らをわれわれの観想 contemplation に正当に提供するためである。最も平凡な仕事でも、それらが自己充足的であり完全であるなら、この特別な性質を有する。最も高貴な仕事でも、それ以外の何かに仕えるなら、それを失うのである。」(p.81)

「たとえば、もし神学が観想として磨かれるのでなく、説教壇という目的に限定されたり教理問答 catechism に代表されるなら、それは——その有用性、その神的性格、その功德…を失うことはなくとも——今私が述べている特質を失う。……なぜならこのように行使された神学は、端的な知識ではなく、神学を利用した技術あるいは職業であるからである。」(p.82)

「リベラルな教育は、キリスト教徒を養成するのでもなく、カトリックを養成するのでもなく、紳士 gentleman を養成するのである。紳士になるのもよし、教養ある知性、デリケートな趣味、率直で公平で冷静な精神、処

世において高貴で礼節ある態度を持つこともよい。これらは、広大な知識から同時に生ずる性質である。これらこそ、大学の目的なのである。」
(p.89)

『大学の理念』の第5講は、「知識それ自身の目的」Knowledge Its Own Endと題されています。知識（学問）は何か実際のな目的に従属するのではなく、知ることそれ自体が知識の目的でありうるということ、少なくともリベラルな（教養的な）知識、哲学的な知識とはそのようなものであるということが、ここでは力説されているのです。大学というものは、単に実践的・職業的な知識を教えるというだけにとどまらず、それらの知識を統合することを教えないければなりません。それが liberal education だということです。ニューマンはこの講義の中で、「リベラル」ということを「奴隷的」servile ということと対立させています。何かに支配され何かに（奴隷的に）仕える知識ではなく、ある意味で自己充足的な知識が、人間を自由人にするのであります。これは、後に第7講で中心的に論じられるように、功利主義 utilitarianism に対する厳しい批判を含んでいます。政治的であれ経済的であれ、何らかの別の目的のために、その手段として大学教育があるのではなく、真理を探究し学ぶためにある。そしてその真理が人間を自由にする⁹⁾のであります。ニューマンは（政治的な意味での）自由主義者 liberalist ではありませんでした、自由な学問はどうしても必要なものだと考えていました。上の引用にあるように、神学でさえも、神（＝真理）への観想から外れて、説教や教理問答を目的とするならば、自由な知識であることを喪失する、ということです。そして自由な学問、自由な教育が生み出すものは、「ジェントルマン」だとニューマンは言います。ここでのジェントルマンとは、英国における階級的な意味でのそれではなく、広い視野にもとづいて偏見なく物事を判断できる理想的な教養人を意味しています。この「大学の理念」の第8講の最後で、ニューマンはジェントルマンの定義を試みっていますが、それは「苦痛を押し

9) ヨハネによる福音書8章32節。

つけることの決してない人」というのが最も近い¹⁰⁾、とっております。信念を持ちつつ他者に寛容であること、それが自由な学問の目標だというのです。

(2) 精神を拡張することが大学の目的である (第6講)

「知性の完成あるいは知性の徳ということを表わす適切な言葉がないために、私はこれまでそれを哲学、哲学的知識、精神の拡張 enlargement of mind、あるいは照明 illumination という言葉で呼んできた。これらの言葉は、今日の著述家たちによって一般的に用いられている。しかし、どのような名称をこのことに用いるにしても、歴史の問題として、私は、大学の仕事とはこの知性的教養をその直接の範囲とすること、あるいは知性の教育に大学そのものを用いることであると信じる。それはちょうど、病院の仕事が病者や怪我人を癒すことにあり、乗馬学校、フェンシングの学校、体育の学校の仕事が四肢の訓練にあり、養老院の仕事が老人を助け慰めることにあり、孤児院の仕事が無垢な子どもを保護することにあり、刑務所の仕事が罪人を立ち直らせることにあるのと同じである。私は、大学というものはその飾りない理念においては、またそれを教会の道具として見るよりも前に、この目的とこの使命を持っているのだと言いたい。」(p.92)

「精神の拡張は、精神の中にこれまで知らなかった多くの観念を単に受動的に受容することにあるのではなく、精神がそれに押し寄せてくるこれらの新しい観念に対して、またそれら観念の中で、力強く同時に活動することにある。それはわれわれが獲得した内容を秩序づけ意味づけるひとつの形成力 formative power の活動である。それはわれわれの知識の対象を主体的に自分自身のものにすることであり、わかりやすく言えば、それはわれわれが受け取ったものをそれまでの思想状態の実体の中へと消化することである。このことなしには拡張が起こっているとは言えない。諸観念が精神の前にやってきたときに、それらを互いに比較することがなければ、

10) "it is almost a definition of a gentleman to say he is one who never inflicts pain", *The Idea of a University*, p.145.

またそれらを体系化することがなければ、拡張は存在しない。」(p.97)

「多くの事柄を同時に全体として見る力、それらを普遍的体系の中でそれぞれあるべき場所に位置づける力、それぞれの価値を理解し、それら相互の依存関係を定める力、これのみが真の精神の拡張である。」(p.99)

「大学の知性的訓練の目的は、学習 Learning や獲得 Acquirement ではなく、むしろ知識の上に訓練される思想 Thought あるいは理性 Reason である。それは哲学 Philosophy と呼んでもよいものである。」(p.101)

「もしも、学寮やチューターによる管理を省略して、ただ広範囲な主題についての試験を課して、それにパスした人には誰にでも学位を与えるというようないわゆる大学と、もうひとつはオクスフォード大学が60年以来やってきたような、教授もなければ試験もない、ただ一群の若者たちを3、4年間一緒に集めておいてやがて送り出すというような大学と、そのどちらの方法が知性の訓練、精神の訓練に適しているのか、選ばなければならないとしたら、……つまりもし、これらの二つのコースのうちのどちらが精神を訓練し、鍛錬し、拡張することに成功するか決めなければならないとしたら……私は何のためらいもなく、日の下のあらゆる学問を獲得するよう学生に強いる大学をさしおいて、何もしない大学を優先させるであろう。」(p.105)

第6講の「学びとの関係において見られた知識」 Knowledge Viewed in Relation to Learning においては、知的教養 intellectual culture と単なる知識 mere knowledge との関係が論じられています。

大学が自由人を育てる場所だということは、大学そのものが国家や教会の支配下にはない自由な場所であることを意味しています。これは、ダブリンにカトリック大学を今まさに設立しようとしているニューマンが、並々ならぬ決意でそれと取り組んでいることを示しています。この彼の決意は、成功によって報われることはありませんでした。彼は、すでに述べたように、ダブリンの大司教との対立の結果、一期4年間のみで大学総長 rector を辞することになったからです¹¹⁾。

人間を自由人にする知識とは、単に多くの事柄を知っているということではなく、知性あるいは精神の拡張 enlargement でもあるような知識のことで。そしてそのような知識を育てる教育の具体的なあり方としてニューマンが思い描いていたのは、彼自身が長年そこで働いたオクスフォード大学でありました。彼はトリニティ・カレッジに代表されるような、信仰を相対化する意味での自由主義教育には批判的でしたが、大学教員を司祭で固めたり、教会が干渉して聖書と矛盾する科学教育を排除するといった偏狭さは、学問の自殺だと考えていたのです。

大学の目的は、学生の精神を拡張することであり、広い視野からものごとを判断する力を養成することです。その目的のためには、定期試験や単位取得制度によって学生を管理する、つまり私たちの現代の大学がまさにそのようなものであるような大学よりも、ただ数年間を先達（チューター）と共に生活しながら学ぶことのできる、カレッジ（学寮）の方がはるかに優れている、とニューマンは考えていました。

(3) 功利主義に対する反論（第7講）

「真理を対象とする精神の目は、修練 discipline と習慣づけ habit の効果である。……この訓練の過程によって、知性は、何らかの特殊なあるいは偶然的な目的、つまり特定の職業や職能 trade or profession, 特定の研究や学問 study or science に向けて形成されたり犠牲にされたりするのではなく、知性自身のために、つまり知性そのものの本来の対象を知るために、そして知性そのものの最高の教養 culture のために、修練されるのである。この訓練の過程は、一般教養 Liberal Education と呼ばれる」(p.109)。

「(ジョン・) ロックはその教育論の中で述べている。『能力・素質に恵まれた人々が、慣習や隠れた信仰によって誤り導かれるという被害を受けていること、それは驚くべきことである。もし理性に相談するならば、次のように答えがあるだろう。子ども時代というものは、大人になったと

11) O・チャドウィック『ニューマン』93頁、石田憲次『ニューマン』（研究社英米文学評伝叢書1936年）、52頁以下。

きに何か役立つであろうものごとを獲得するために費やされるべきであって、がらくたを頭に詰め込んではいならない。それらがらくたのほとんどは、その後の生涯を通じて二度と思い出されることがない（それらが必要ないことは確かだ）のが普通であるばかりか、彼らを困らせ、悪いことにしかならないのだ。』(p. 113)

「ロックがしたように、ここで『有用』という言葉を取り上げるが、ただしそれを本来的・一般的な意味で考えたい。そうすると私たちは、一つの講義では扱い切れないほどの、広い思想のフィールドに入ってゆくことになる。……『有用』useful という言葉を、『単純に善いもの』という意味ではなく、『善くあろうとするもの』what tends to good,あるいは『善への手段であるもの』という意味に解したい。そしてこの意味では、リベラルな教育は、たしかに職業教育ではないとしても、真にまた十分に有用な教育であるということを示したい。」(p. 116)

「知性的教養を考えると、私は教育の目的は広い意味での功利性 utility だということを否定しているのではまったくない。それは私が功利性を引き下げ、知性の教養はそれ自体において善いものであり、それ自体の目的であると言うときにも同様である。……私が否定しているのはただ、それを有用だとする権利もないのに、ある種の技術、事業、職業、商売、あるいは仕事を、教育から結果するものであるとか、教育の現実的で完全な目的であるとしうる、という考え方である。……身体が何らかの手仕事や労役のために用いられるように、…知性もやはり特定の職業のために捧げることができる。しかし私はこれを知性の教養 culture of the intellect とは呼ばないのだ。」(p. 117)

『大学の理念』の第7講は、知識と職業的熟練 Knowledge and Professional Skill と名づけられています。ここでニューマンは、職業技能的学問を否定したり、大学教育から締め出そうとしているのでは決してありません。医学、法学、神学なども職業技能的学問です。ニューマンが否定しているのは、それらの技能が教育の目的だとする功利主義 utilitarianism の考え方です。

つまりそれらの職業的スキルはもちろん大切ですが、知的訓練の結果としての知識 *knowledge* は、それらのスキルをどのように用いるべきかという、統御 *rule* に関わっているというのです。この知性そのものの訓練に関わる教育は、一般教養 *Liberal Education* と呼ばれます。私たちは一般教養と言うと、大学教育の基礎課程であって、専門教育の方が上位にあると考えがちですが、ニューマンは、これは基礎でありつつ大学教育の最終目的でもあると考えているのです。

ニューマンの主張は、ともすると知識を自己目的とする知識至上主義だと誤解されそうですが、彼の言う「知識」*knowledge* とは、単に多くの物事を知っているということではなく、ことがらの本質へと開かれた目を持つことであって、判断力 *judgment*, 明察 *clear-sightedness*, 賢明さ *sagacity*, 知恵 *wisdom*, 哲学的な洞察力 *philosophical reach of mind*, 知性的な冷静さとゆとり *intellectual self-possession and repose* などとも言い換えられる概念です¹²⁾。ですから、続く第8講以下において、ニューマンは知識と宗教（彼の場合にはカトリック）の関係を考察しており、啓発され拡張された精神、つまり彼の言う「知識」は、ある意味で宗教的とも呼びうることを述べています。

(4) 宗教との関わり (第8講)

「ひとつの問題がまだ残っている。すなわちこの知性的教養は、それ自体がここでは賛美されているのだが、しかしそれは社会的・活動的職務に関わっているのみならず、宗教にも関わっているということである。教育を受けた精神は、ある意味で宗教的だとも言えよう。」(p. 127)

「彼（知性的教養のある *gentleman*）も、その見解においては正しかったり間違ったり *right or wrong* するであろう。しかし彼は、不正 *unjust* であるにはあまりにも明晰である。彼は単純であると同時に力強い。簡潔であると同時に断固としている。彼に勝る率直、思慮、寛大はどこにもない。彼は敵対者の立場に立って、その誤謬を説明する。彼は人間理性の弱さと強

12) *The Idea of a University*, p.109.

さ、その領土と限界をよく知っている。たとえ彼が不信仰者であったとしても、非常に思慮深く心が広いために、宗教を嘲笑したりそれに敵対して行動することはないであろう。彼は非常に賢明であるので、自分の不信仰において独断家や狂信者にはなりえない。彼は敬虔な心情と献身的な態度を尊敬している。自分が擁護していない宗教制度でも、崇敬すべく美しく有益なものとして支持しさえもする。彼は宗教の祭司たちを尊重し、その神秘に対しても攻撃したり非難することなく、喜んで頭を垂れる。」
(p.146)

教養としての「知識」は、それ自体が宗教・信仰だというわけではありません。啓示にもとづく信仰と、理性にもとづく知識ははっきりと区別されます。しかし、よき教養は人を謙遜にするのであり、そのような習慣を身につけた精神は、宗教を尊敬し尊重することへと人を導きます。

ニューマンのこの講演は、大学の設立者である教会人に対してなされたものですが、彼は真の教養人が宗教に敵対するものではないことを力説しています。たとい教養人たちが宗教者や信者ではなかったとしても、彼らは宗教に対する深い理解者であり、支持者でもあるというのであります。

3. 今日の大学の課題

ニューマンが大学の理想としたオクスフォード大学や、ベルギーのルーヴァン大学、またドイツ・ベルリンのフンボルト大学などには、ひとつの共通の理念がありました。それは、大学というものは基本的に、若者に教養を身につけさせる機関だということです。特定の職業教育ではなく、言わば人間を自由な人間にするための教育、それがリベラル・アーツとしての大学での授業の基本的な理念であったわけです。

このような大学の理念は、今日ではもう通用しないとお考えの方がいるかもしれません。確かに、このままの形では多くの困難があることが目に見えています。しかしだとしても、このような大学理念とは別の、全く新しい理

念がその後提出され、一般に承認されて、新時代に対応してうまくいっているかと言えば、そうではありません。時代に合わせた修正は勿論必要ですし、種々なされてはいるのですが、今日でも大学が真に大学であるための理念は、ニューマンの時代からあまり変わってないようなのです。すなわち、大学は、一方で時代の要請に答えると同時に、ひとつの時代を越えた価値を若者に身につけさせること——それは「教養」culture, Bildungと呼ばれたり、あるいは「自由」と呼ばれたりしておりますが——がなければ、大学とは言えない。そのような価値を身につけた人のことを、ニューマンは「ジェントルマン」と呼んでおります。

最後に、ニューマンの時代から150年を経た、現代の大学が抱えております課題を、ドイツの哲学者 Hans-Georg Gadamer 1900-2002 によって補足しつつ、簡単に御紹介したいと思います。ガダマーは、「大学の理念——昨日、今日、明日」Die Idee der Universität -gestern, heute, morgen という講演(1986)¹³⁾の中で、古典的な大学の理念(ドイツの場合は、ベルリン大学を創設したヴィルヘルム・フォン・フンボルト1767-1835が大学の理念を提出したと、ガダマーは考えます)の後に、特に第二次世界大戦後の大学が抱え込んだ三つの困難(三つの疎外)について述べています¹⁴⁾。

(1) 大学の大量化(教授と学生間の疎外)

第一に挙げられるのは、爆発的な量的拡大に起因する教授数と学生数のアンバランスによって、学問の場所としての共同体が危うくなってきたことです。学寮という共同生活の場が大学の基本的な姿ではなくなり、教授たちも、大学やその周辺に居住するのではなく、遠くから通うサラリーマンになっています。教授と学生の直接の人格的な触れ合いはしだいに薄れてきています。学生が先生のところに自由に入出入りして学ぶという学問の古い形態が失われてきた中で、どのようにしてその欠点を埋めるのか。それが、ニュー

13) H-G・ガダマー他『大学の理念——立場決定の試み——』玉川大学出版部 1993年所収。

14) 同書9頁。

マンの講演以降の大学が抱えている第一の問題です。

ガダマーはこの問題を、「教授と学生との疎外」¹⁵⁾と言っています。これを乗り越えるためには、教師と学生が何かを共同で研究し、協力するというを中心にして、共同体の再建を目指すということしかないということです。楽観できる状況にないことは、ガダマーも認めているのですが、学生相互の、教授たちの間の、あるいは教授と学生との共同体意識を高める必要があるということです。

(2) 学問分野相互の疎外

第二に、学問の細分化、研究諸機関の多様化によって、学問の全体像がつかめなくなってきました。総合大学 *Universitas Literarum* はどこへいったのか、とガダマーは嘆きます。お互いにバラバラな諸学問とその授業を学んでも、学生は困惑するばかりで、学問をする人間としての彼のアイデンティティ形成にはつながりません。専門化しすぎた大学において、教授などの研究者も疎外されつづけています。年をとって、新しい研究についてゆけなくなり、自分の専門分野そのものからも疎外され孤立化してゆく教授たちが数多くおります。

この状況を打開するには、学問の全体像を提示する試み、学部間の相互理解を深めるような試みが、必要になります。教員各自が自分自身をこの全体像に対して相対化し、それに対して開かれた自由な態度をとることが必要です。そしてそのようなりべらるな態度こそ、学生に伝えなければならないものであります。

これは私見であります。この学問の全体像、大学の全体像を提示するという試みにおいて、キリスト教は何らかの貢献をキリスト教大学においてすることができるのではないのでしょうか。神学という学問は、今でもその学問としての全体像を保っているほとんど唯一の学問ではないのでしょうか。哲学ですらその全体像を失って各自の専門分野へと細分化してゆく現状において、

15) 同書 16 頁。

大学の全体像を回復することは容易なことではありません。キリスト教主義にそれだけの力があるかどうかはわかりませんが、いずれにしても大学を大学にしている本質的な何かを提示することは、私たちにとって必要なことだと思います。

(3) 現代社会と大学の間の特異性

ガダマーはこれを「最も深刻な問題」と呼んでいます。現代社会の中で大学は、職業のための準備に過ぎないということは、学生たちの誰もがよく承知しています。昔のオクスフォード大学のように、大学に行くこと自体がすでに社会の中でひとつの階級・身分に属することを表わした時代、あるいは19世紀のドイツにおけるように大学卒業生 *Akademiker* であることがそのまま彼の教養市民としての身分を形成していた時代は過ぎ去りました。大学は現代社会において、どのような役割を果たしているのでしょうか。大学を卒業することにはどのような意味があるのでしょうか。以前は自明のように思えたそのことが、今では多くの人々にとってよくわからなくなっているのです。そのために大学は、何か4年間の長い休暇のようなものとなっています。

大学は昔も今も、ある意味で社会に対するオフサイド的な立場にありました。それが大学の自由ということとも関わっており、また逆にそのことによって実は社会にも貢献してきたのです。私は、西欧の中世思想を研究する者ですが、それはちょうど中世の修道院社会が、世俗社会の外に立つことによって、逆に世俗社会に貢献していたのと似ています。中世社会において多くのものが修道院から生まれてきました。その中には大学も含まれます。しかし今日では、大衆化した大学は完全に世俗社会の一部になってしまっているようでもあり、社会にとって不可欠な役割を受け持っているようであり、しかも本質的には社会には貢献しない、単なる空白の年月であるようでもあります。

ガダマーは言います。大学とは「ある特定の身分の特権としてではなく、人間の可能性としての理論・知識 *Theoria* の自由な空間である。この可能性

はいかなる人間においても実現されうるものであって、この可能性をすべての人々のためにますます発展させることが、大学に課せられた使命である」¹⁶⁾。大学は *Theoria* の自由な空間でなければならない。ニューマンによっても主張されたこの大学の基本理念は、今でも、そして今こそ私たち大学に生きる者に問いかけられていると言わなければなりません。「真実を知る」ということそのものが、大学の教育の中心であり目的でなければならないのです。その中心を失って完全に世俗化したときに、大学の存在意義もまた失われてしまうのだ、と思われるのであります。

16) 同書 22 頁。